

委員会における主な意見

第 8 回から第 15 回委員会における委員意見及び平成 21 年 8 月に文書提出された委員意見を整理したものです。

【全施設共通事項】

今回の対象の教育・文化施設については、現地調査でも各委員から、必要ないという意見はなく、収益の上がないものという共通認識であり、そこから議論を出発しなければならない。一方で財政の事情がありながら、子ども達のための教育・文化を群馬県としてどう担保するか、という議論をきちっとしなければいけない。例えば歴史博物館では県外の子どもがたくさん来てくれており、収益は上がらないものの群馬の知名度アップに大きく寄与していることから、基本的には県の直営施設として残して、どう改善ができるのかという議論をすべき。

教育的価値が大きいのが、縦割りで有効に機能していないということ。教育的価値があるなら、県全体として所管部を越え、施設をどう活かすかという仕組みを制度化してやらなければならない。また、近隣の類似施設との連携もさらに進めていただきたい。

施設があるのに、予算が削られたため、中途半端になってしまっている。(施設を活かす仕組みを)制度化することで有効利用し、未来の子ども達のためにもっと積極的に連携を図るべき。

この委員会の答申で職員の目が覚めた。天文台も館林美術館も同様である。成果が出るのに数年かかると思うが、他の県でやっていないものをなぜ群馬でやるのかと考えるか、それとも、それが群馬の個性だと考えるか、色々な考えで、評価されることを期待したい。

この委員会は行財政改革の観点から始まっていると理解している。もっと活用する方法や、今までの感覚ではなく、新しい仕組みを考える必要があるのでは。技術者や施設などの財産を活かすためにも、教育の中で、お金のかけ方が重要であるという提案をした方がよい。

教育的価値がある群馬県の誇りを、壊していいのかというのがこの委員会の本質であると思う。天文台の時に誰もが、造る前に言ってもらえばよかった、できた後に、壊せとは言えないという感想であった。現状における財政力とのミスマッチがすべての原因である。徹底的に叩いて、潰すわけにはいかないから、とことん厳しく委員会のデモンストレーション効果として、公務員の意識を変えることが重要。

いいものは残したいと思ってしまうが、そのためには群馬らしさが重要である。群馬はものづくりだと思ふ。将来どのような大人を作っていくかというニーズを考え、ものづくりのために、例えば、3回施設に行けば昆虫博士の資格がもらえるといった形で、夏休みなどにいくつも資格が取れるような工夫が欲しい。企画の順位付けをすることが重要。

それぞれの施設が設置された地域にとって、これは貴重な財産であり、多年にわたる誘致活動の成果であり、これによって地域の魅力が増し、各市町村が充実発展の道をたどると願っている。

時代の要請に応じて造られ活用されたが、現在も将来も利用が見込まれない施設は割愛すべき。

管理運営方法について、行政コスト（入館者一人当たりいくらかかっているか）が重要である。この観点から、天文台や昆虫の森が問題となった。県として赤字というのではなく、利用者数に応じたお金を配分すれば良いのだと思う。毎年の予算管理や中長期計画の管理にも、行政コストの目標を掲げ、実行し、チェックしていくシステムが必要。

文化・教育施設だからといって、赤字について何も考えないわけにはいかないし、赤字をなるべく減らした方がよい。美術館は典型例で、イベント展覧会などをした後に検証することが必要。終わったあとで教育効果をもう一回考えることで、次に繋げるという意識付けにもなる。外部によるウオッチでもよいが、緊張感を高めることで、赤字は減るのではないか。

文化的な教育施設については、あまりお金のことは言うべきではないと思っはいるが、昨年委員会で議論された施設の職員の意識は、特にこの半年で大きく違ってきている。今後も外部から点検されているという意識付けを是非やってほしい。

聖域なく経費を絞ることは悪いことではない。実際、現場の努力や創意工夫に繋がっている。このため、経費を削減する際には費目を指定せず、現場の職員の創意工夫の余地を残すことがとても大事。

県であれば県民の欲する政策施策は常に財政力を上回り、これに順次応えれば財政の窮迫する状況はむしろ当然。現在は世界的に経済が激しく収縮している折であり、税収減も激しく、経費の削減を求められるのはやむを得ない。

設置当初より必要と計上していた要員・予算を削除するのだから、決断するにしても切れ味の良さばかりでなく、将来の可能性や地元民の希望を生かす「やり方」を期待する。

教育施設として設置されたものや、美術館・博物館等の文化施設は収益事業ではないのだから、赤字金額とか、収益改善といった表現で投入経費を表現するのは誤解のおそれがある。

県営施設に係る費用は、その負担が財政全体からバランスするよう建設されることが本来の姿。

情報発信力が足りない。この委員会の委員でも、現地調査で初めて行ったという施設があった。もっと情報発信に各施設が一生懸命取り組むべき。

県のホームページについて、県の施設のページは内容がすごく堅い。県トータルとして、PR方法をもう少し柔らかく、興味を持ってもらう形にできないか。

まずは県民に施設を知っていただくことが重要。例えばネットの検索対策などについても、多少お金をかけた方がよい。

多くの施設では利用者の増加に努力している姿を伺うことができたが、同時に感じたのが広報・PRのワンパターンであり、『今回はこれが見もの』というようなアピールが足りない。結果、いい企画にも関わらず、入場者が伸びないのでは。もっと工夫してもらいたい。（中間報告書対象施設は、イベント告知が目立つようになった。）

全施設で利用者・来館者の多少が常に議論を呼んだが、気になる点は施設への往来を自動車としているところ。定期バスは採算が難しく、団体以外は個別に自家用車では、子どもと老人はなかなか来館できない。これからの暮らしを考えると集客施設は努めて鉄道沿線の駅周辺用地が望ましい。

県有施設は、県民の日だけ無料開放しているが、例えばイギリスでは大英博物館は常に無料であり、フランスのルーブル美術館は毎月第1日曜を無料とするなど、多くの人を集めている。このように無料開放ができるならば、独自で考えてアピールするのが有効だと思うのでやっていただきたい。

無料化の場合、その財源をどこが負担するのかということが問題になる。岡山県方式（補助金として収入に入れる）により、あくまで見かけ上であるが、赤字の圧迫から回避させるのも有効か。

問題は料金設定よりも、観光業者が利用する民間施設は、バックマージンがあるというのがポイント。行政としては難しい面があるため、業者を大事にする、何か他の工夫が必要。

夫婦であれば半額、恋人同士であれば半額など、おもしろい話題を作ればマスコミが取り上げるのでは。

複合施設、例えば水産学習館はつつじが岡公園の中の一つのものであるのに、所管がバラバラであるが、県民から見れば変わりはない。全体を一元化し、事業主体をはっきりとし、目的意識を持って一つの施設を運営することの必要性を強く感じた。自然史博物館も土屋文明記念文学館も同じであり、ロケーションが活かされていない。県民意思と違ったところで運営が行われている。

指定管理者制度は、教育・文化施設にはなじまない。本委員会の提言により、それぞれの施設で意識改革に至った。社会教育施設が微妙で、利用が季節限定であり、閑散期との組み合わせに改善の余地があると思うが、行政だけではなかなか発想がないところに民間的な視点が活用できるのではないか。

財政が厳しい中で、NPO・ボランティアとの更なる協働というのはわからないではないが、施設によってはマイナスになることもある。本来行政がやるべき施設であれば、行政が責任を持ってやるべきではないか。

例えば銀行では、不振の企業を再生する時に、PDCA サイクルを自分たちでやらうのが理想形だが、残念ながら、自分たちではどうしても甘くなり、なかなかできるものではない。やはり第三者的なところに自分たちのお金で評価をしてもらうのが良い。

外部評価で、「三つ星」の公共施設というのも観光資源になるかもしれない。

県民のために造られた施設なのだから、県有施設の運営などを関係者以外で点検、評価する仕組みがあったらと思う。監視や監査など厳しいものではなく、年数回アドバイスするような機会が必要かもしれない。

答申を出して1、2年は緊張感を持って取り組むと思うが、人が変われば、どうしても持続されない面が出てしまうので、外から必ず監視すべき。

【歴史博物館】

博物館学習で多く利用されており、かなりの小学生が来館している。県外の利用も多いようであるが、特別な働きかけをしているのか。

開館から30年、観覧者も400万人を超え、群馬の文化・教育施設としての役割は十分果たしている。企画展示も小中学生対象の体験学習も興味あるものが多い。

常設展示の見直しなど検討課題については、その時その時に合わせたタイムリーなテーマに替える努力を続けて欲しい。

群馬の場合は、全国に誇れる郷土の偉人や遺物がたくさんあると思うが、意外に知られていない。もっとこれらに光をあててアピールする展示方法もあるのではないか。

すばらしい展示品について、説明文もあるが、ただ見過ごすだけでもったいない感じがする。案内によって、展示品の説明や時代背景などがわかると感動が高まり、リピーターも増えると思う。また、ボランティア案内についても、個人的考えを述べられて困るとの意見があったが、それは、博物館で事前にボランティアの研修や意思統一すればできることだと思う。自然史博物館や富岡製糸の案内は参考になる。

教育普及について、学芸員に比べ業務内容がわかりにくいのではないか。

情報発信は、従来の公共施設や学校などへのポスター配付、マスコミへの資料提供だけではなく、話題性ある情報も考慮すべき。

開館から長く経つと、努力する気持ちが薄れてしまう。歴史博物館の現地調査の際、図録を購入したが、半月足らずで売り切れそうだという話を聞いた。入館者目標3万人に対し、図録は600冊しか用意していなかったということであり、これは民間では考えられず、意識が甘い。たとえ売れ残っても、企画展終了後も売店で販売すればよい話である。

近代美術館、群馬の森との連携・一体化は、管理運営面や広報の共同（ポスターに両施設の案内）など、可能なものから実行していく。

この施設については、指定管理者制度の導入対象とはならないと思う。

【土屋文明記念文学館】

どうしても土屋文明の個人文学館というイメージを持ってしまいが、実態は総合文学館である。文学館の収入を増やすためには、観覧者を増やす必要がある。

名称変更はよいと思うが、土屋文明は全国的に見ても有名な方であり、郷土の偉人でもあるので、何らかの形で子どもたちには覚えてもらいたい。

文化的な価値も高い施設だと思うが、他の施設からすると、施設の性格上、地味であり、大衆性にかける面もあり、運営は大変だと思う。入館者もここ数年減少傾向を示しており、名称変更を含め転換期にあるように感じる。

名称は、土屋文明の名を残すとしても、文学館を全面的に出したほうが、良いのではないか。

本県の総合文学館としての位置付けを、もっと鮮明にすべき。近現代に限定しないで古事記、万葉集の時代からの関わりのある故事、作品の紹介があっても良いのではないか。

教育的機能をもっと発揮してほしい。来館の実績をみても、高崎市内の数校の小学校しか来ていない。また、これだけ立派な専門職員がいれば、学校等に出向いて、もっと郷土の文学を子供たちに話してやる機会もほしい。

文学に興味、造詣のある人ばかりが対象でなく、幅広い層の人に足を運ばせる斬新な企画をもっと期待したい。

この文学館には、何回か観覧に来たことがあるが、作品等に関する説明を聞いたことがない。一般の観覧者が職員の方に説明を求めるといっても、なかなか難しいので、時間を決めて、説明時間を設けるなどの工夫をしてもらえるとありがたい。

展示施設の要素が半分、収集保存といった研究施設の要素が半分。施設の位置付けが

中途半端であり、ここを明確にすることが必要なのでは。もともと利用の促進が図れる施設ではなく、研究をしっかりとしていくべき。

誘致された県有施設については、市町村レベルで管理してもらった方がよい。

知識と経験を持ったボランティアを主力にして運営していくことがよいのではないか。その場合、わずかでも手当を出す方がよい。

この施設については、指定管理者制度の導入対象とはならないと思う。

【自然史博物館】

4億円の経費で、これだけ頑張っており、素晴らしい施設である。県内の子どもたちに感動をいっぱい与えてもらいたい。

自然史博物館は、年間4億円以上の赤字が出ているが、年間入館者が16万人となっている。赤字をどうするか。赤字でもよいと考えたときに、それでは何で判断するのか、一つには、入場者数だと思う。自然史博物館は、4億円の赤字があるが、子どもたちにとっては面白い、興味がわく施設である。

群響や尾瀬のように教育の政策としてやっていただきたい。昆虫の森、天文台も同じである。小学生が遠足で来れば、その後家族で来ることにもつながり、PRにもなる。

子ども達に好評ということであるが、大人や観光に十分耐えうる施設である。観光の要素を取り入れていいのではないか。館の関係者だけではなく、PR会社や、観光物産課等のノウハウを入れて、新たな集客の展開が図れるのではないか。

この施設は、我々が認識している以上に価値のある施設だと思う。教育的価値もさることながら、観光施設としても全国に誇れる魅力ある充実した施設だと思う。ただ、残念ながら、その価値が県民に十分認識されていない。

県内の自然の生い立ちや豊かな環境を紹介する誇るべき施設。また、恐竜の時代やヒトの起源の展示なども、年齢に関係なく来館者の興味を引いている。教育施設として解説員の役割も良い。しかし、開設から10数年、展示品の傷みも散見される。修理、更新を進めながらリピーターの増加を図るためにも、ロマンある企画展を期待したい。

先生が知らないと、これだけの施設を子どもたちに紹介しない。子どもは家族と来るだけ。文化と教育で縦割りになっているが、もっと全体で、システムで根本的にやっていかないと難しい面がある。感想としてはとても素晴らしい施設。

いくら教育の場だとしても収入の確保は重要。有料の利用者を増やすため、県外者の利用を促進することは大いに結構。軽井沢やサファリパークのついでに、ということで立ち寄ることがあるかと思うので、頑張ってください。

これだけ価値ある博物館をアピールするためには、名称を群馬県自然史恐竜博物館としたほうが良いのではないか。

今日施設を見させていただいたが、緻密な作業をされていた。リピーターを増やすため、またよく理解してもらうために、数回に分けてみてもらう工夫ができないか。短時間で見てもらうのはもったいない。

平成18年度は開館10周年で利用者が多い。経費がかかると思うがこういう企画を考えればよいのではないか。

大学や地域との連携を有機的にどうやったら図れるか。

自然史博物館と昆虫の森では、同じ生物を扱う施設であり、重なる面も多いため、連

携を深めることで経費削減が図れるのではないか。

委託料はもっと絞れるのではないかという気がする。

この施設の良い点は、時間によって、会場案内係の方がおり、施設全体のポイントを要領よく案内し、見学者に感動を与えていること。見学だけでなく説明を聞くことによって、その感動と想像力が増し、その展示物が魅力ある貴重なものだとの認識し、見方も変わる。

PR方法については、ショッピングモールで宣伝するのも有効。

家族で来館したときに、ボランティアの方が30～40分かけて丁寧に解説してくれ、感動が全く違った。行った人の印象が高まり、リピーターにも繋がると思う。できる限り解説することにしてもらいたい。

本日車で来館したが、博物館・ホール、公園といった個々の施設の看板がいっぱいあり、わかりづらい。利用者にとっては、複合施設、一つのロケーションである。縦割りの弊害とは言わないが、どこの施設を誰が管理しているかなどは県民にはわからないので、統一的な名称をつけるなど、もう少し横の連携が必要。

博物館・ホール・公園・福沢一郎記念館等、一カ所にあり、合理的だが、当博物館自体が埋没し、わかりにくい面がある。もっと独立した案内や看板等がほしい。

自然史博物館の附帯施設のかぶら文化ホールは、指定管理者である市の管理となっているが、博物館に併設しているという構造上の問題などもあり、博物館と文化ホールの共通部分は県が全て負担しているという分かりにくい形になっている。文化ホールが指定管理者で管理できているのだから、学芸員については派遣で来ていただくとしても、施設の管理くらいは自然史博物館と共通にできないのか。

この施設については、指定管理者制度の導入対象とはならないと思う。

【精神障害者援護寮「はばたき」】

ある程度薬で症状を抑えられるようになってきているようだが、こういう県有施設がなくなって、重症者の行き場が無くなっては困る。

このような施設は、生活支援や職場復帰、職業訓練といったものが一体となって推進されないと、いろいろな効果が出ないので、こういったことができる団体が引き受けてくれることが必要。

職員をいきなり引き揚げてしまうことになるが、ノウハウはどのように継承するのか。

処遇困難者を引き受けているので、指定管理者制度導入の方向性が決まったら、これまで以上に丁寧に見ていかないといけないと思う。特殊ケースであるので、専門家の方にもたくさん入っていただかないと難しいのではないかと印象を持った。

利用料金は現状のままでも、現在のサービス体制を維持できるのか。

指定管理者制度導入に向けて手続きを進めることで問題ないと思う。民間に移管したのでは受け手はいないが、県有施設のまま指定管理者制度を導入するのであれば、受け手が見つかりそうとのことであった。実際、やってみなければ分からないところもあると思うが、県内部で検討を重ねる中で、指定管理者制度であれば十分やっていけるという結論に至ったのだと思う。改めて議論しなければ、結論が出せないというような問題があるとは思えない。

県として、こういう施設は必要だと思う。先進諸国の中でも、日本は精神障害の入院

患者が非常に多い。国では、復帰プログラムをどのように考えているのか、また、県として、どのように青写真を描いているのか心配な面もあるが、その中で指定管理者制度の位置づけをよく考えて、導入していかなければならないと思う。

他の公の施設とは事情が異なる。事前引継ぎなども含めて、公募要件として募集要項に記載が必要な事項があると思うので、今後十分に詰めていただきたい。

【水産学習館】

水産学習館は「水生生物とその生息環境の学習の場」としても中途半端という感じである。一旦施設を廃止して、新たなものを作っていく方が良いのでは。温室にしても中途半端で、はたして残しておく必要があるのか。地元の館林市も四季型の公園化という要望であり、具体的な提案ではないので、一旦無くして考えた方がよいのでは。

設置目的とズレが生じている現状からすれば、水産学習館を廃止することを前提として、白紙から考えた方がよい。

施設の規模は小さく、中途半端である。公園全体の中で位置づけをしていかないとかなりきつい。

水産学習館は廃止すべきである。既存施設がもったいないから何か活用できないかという議論ではなく、白紙に戻して、教育機関・水産振興の場として必要であれば何か作ればよいが、同じ施設を作るかというと思わないと思う。施設を廃止して国に補助金を返還した方が、コスト的にもよい。

内水面漁業の振興は、水産試験場がやっている。学校では小川にでかけるなど環境保護の観点からの学習を現場で考えれば足り、水産学習館は意味を持たず、使命が終わっている。

水産学習館を利用している学校数が少ない。実際、向井千秋記念館に行ったついでに利用されているという感じである。

学習効果があるかという、難しい。

現状ではつつじが岡公園の管理が複雑になっており、一体的に、全体で管理すべき。この委員会では水産学習館が課題であるが、この使命が終わったことを前提に、管理そのものを館林市と協議して、管理全体のあり方を考えてほしい。

隣県からの利用が多いのはいいとしても、周辺地域の利用が主であり、館林市への移管も視野に入れるべき。

廃止して更地にするというのはどうかと思うが、今とは違う形で、こども達の学習の場として特化した方がよい。

魚の卵などを直接見られるという学習の場としては、こども達にとってはいいものだと思う。

温室と水産学習館のあり方については、一体で考えるべきではないか。

館林の教育委員会や県の教育委員会などが、教育目的に沿って、もっと経費をかけずに運営するのが一番よいのでは。

展示が細々として雑然としている。学習の場というのであれば、外来魚の産出国を明記するなど工夫が必要。

展示がわかりづらい。必ずしも県の全ての魚類を展示する必要はなく、工夫をすると学習効果が上がるのではないか。

大きい外洋水族館がある中で、この施設でお金を取るのは難しい。

入ってみるとなかなか面白く、狭い空間に良く入れ込んだと思えるが、入口・外観・規模等を見るとアピールする要素に欠け、やや貧弱な印象を受ける。水産学習館が現状以上に認識・評価される期待は難しい。

河川・湖沼にすむ魚類を集めた意味のある学習施設である。河川も湖沼も森林・田畑と表裏一体の大切な環境であり、そこに住む生物こそ環境の状態を写す姿である。植生や川魚が健全であること、その状況を常に観察して、生活習慣を見直すことは、小中学生の時に学ぶべき大切な事柄。

年間経費もそう多額とは言えず、負担可能な範囲内であり、設備の充実はしばらく置くとして存続すべき施設。

児童・生徒・学生などを中心に、意外に多くの見学者の実績があり、本州の中央の海なし地域でユニークな存在と役割のあることを再認識した。方式はともかく存続させたい。

今後群馬県として内水面漁業の振興はしていかなければならないという面があるので、例えば水産試験場など他の所でしっかりと充実を図っていくべき。

【北毛青年の家・妙義少年自然の家・東毛少年自然の家】

交付税自体が減額される中で、運営はより厳しいものとなっていると思うが、必要性が高い施設。

自然に親しむということでは、この施設をなくすということは全く考えられない。

収支の状況を見ても節約するところはないような状況であるが、教育施設であるという、基のところを大事に考えてほしい。あまり赤字赤字というのはいかがか。

若いほど教育効果がある。小学校の時に、こういったところで色々な体験をすることはとても大事である。費用は削るべきではない。

施設自体、かなり古くなっているが、今後、3施設全部を引き続き運営していくのか。いくつか絞って良い施設にしていくという運営方法もあるのではないか。

企業の利用促進など、需要があるところにシフトしていくのは、施設の目的からして本来の姿ではない。そもそも教育施設である。利用者がだんだん減っていくのはある程度は防げず、空きを使ってもらうのはよいが、目的は、少年というよりもむしろ小中学生を対象とすることにあり、そのところはブレないようにしなければならない。利用者に合わせて、例えばお酒を飲めるように変えることで、本質をだんだん弱めてしまう。

本質がブレなければいいと思う。社員の研修で使うのも、ホテルよりもこういった簡素なところの方が身が締まる気がする。子どもの利用がない日に、企業が利用するということが前提の話である。

企業の利用を促進するためには、部屋の改装等も考えて行かなければいけない。また、その他の市の施設とのタイアップなどを含め、将来的な検討が必要。

前橋市、高崎市が中核市となり、合わせると県内の3分の1の児童・生徒数となる。両市が独自の施設だけ使うことになれば、その分利用者が大幅に減少するという心配がある。これに対応するため、施設を変えて、特に秋から冬は、社会人の研修中心で受け入れるような対応も考えていかなければならないと思う。今後ますます少子化も進むが、東毛については企業もたくさんある。

秋から4月までは企業等の受入が可能だが、20畳の部屋を17人が利用するというのは、高校生でも嫌がる。

子どものガールスカウトの関係で、この施設を年に最低1度は必ず使っているが、できれば大人と一緒に使わない方がよい。

建物自体が非常に古くなっている。本当に自然学習に建物が必要なのかという視点も必要だと考える。例えば尾瀬なら丸沼地区にいくらでも民間施設があり、自然の家とそんなに違いはない。その意味から、尾瀬学校と北毛青年の家を結びつける必要が本当にあるのか。

尾瀬学校との連携を民間施設でという話が出たが、県有施設は無料であることが大きい。施設を評価する仕組みについては、利用者である先生の意見をしっかり踏まえたものとするべき。そもそも県として子ども達に教育をしようとして作った施設であり、その辺に立ち返って考えるべき。

少年自然の家関係の3施設は、かなり老朽化している。家庭の中で自然体験できる機会がなかなかない。厳しい財政状況のもと、公共施設のあり方を検討している中で発言しにくいのが、可能であれば施設を新しくしてもらいたい。

例えば、脱衣所などは、職業訓練校などを活用して県産材を使って棚を作ってもらえば、費用が少なく済むのではないかと。

青年の家・少年自然体験の場所として、すごく重要であると思うので、改修や、NPOとの連携を進めてほしい。また、受け身ではなく「こういう企画をやりますので」ともって群馬県らしさをアピールし、ソフト面を強化するとよいのではないかと。

こちらの施設を何度も利用しており、結論とすれば、個人的には施設を残してほしい。委員会の審議対象となったのは、経費の節減が必要ということなのだろうが、例えば人員について、ピークに合わせて配置せざるを得ないと思われるが、そういうところを削減する努力をしていただきたい。

使用料の減免措置は例外的な対応と思うが、ほとんどの利用者が減免で、80%を超えている。施設の性質上、当然、収支をプラスにしようということではないが、100円でも200円でも使用料を徴収した方がよいのではないかと。

時代背景も変わってきており、部屋の問題の解消や飲酒ができるようにすることで、利用率が上がるのではないかと。

学校の生徒数が減っているが、ボーイスカウトなど子どもの団体に積極的にPRするのが有効。

【生涯学習センター】

本センターは、まさに教育的な施設である。年々赤字が出ているとのことであるが、教育施設で赤字という表現は妥当ではない。教育を目的として投資をしているわけで、そういう見方がされれば、県立高校も赤字ということになってしまう。

本来、生涯教育は、草の根のものであり、市町村レベルで実施して然るべきだが、市町村で足りないものを県が実施するということで、県の役割もよく理解できる。そう考えると、県が実施する研修の内容をより高度化せざるを得ないわけで、そういう役割を県がどのように担っていくかということになる。

生涯教育に関して県民からどのような需要や要望があって、これらに将来的にどのよ

うに対応していくのか。

高齢化社会へと進む中で、このセンターが生涯学習へのヒントや活動の支援をする場であり続けるため、価値観が多様化しても生き甲斐を持って日々の生活が送れるような充実した全県民を対象としたプログラムを整え、市町村の同様な施設の強いリーダーであるべき。

本センターは、非常に立派な施設であり、個人的には教育的意義は大きいと思う。ただ、費用対効果がどれだけあるかということが課題。

これまでにいろいろな施設を視察したが、それぞれが一つの目的に沿った施設だった。これに対して、本センターは、幅広い県民を対象としており、多目的な施設となっているが、利用者が固定化するようなことはないか。

本センターには、指導主事や社会教育主事として学校の先生が8人いる。一般的に学校の先生は社会を知らないとか、人付き合いが下手とか言われるが、何年間か、こういった職場を経験し学校現場に戻ることは組織的には大切。戻られた方のお話を伺っても、非常に良い経験になったとの感想を持っていた。

利用数が多いのか少ないのかの判断は難しいが、少年科学館は内容的には素晴らしいと思う。これからも力を入れてもらいたい。

市町村と県との役割分担に関連して、地理的な面で前橋市内の利用者が多いのは分かるが、囲碁や将棋、スタジオなど、貸し館的な、公民館的な要素がある。教育委員会の教員が、こういった業務に関わる必要はないのではないか。教育的な業務は、教員がやらなくてはならないと思うが、貸館業務までやる必要はないのではないか。利用者の地理的な偏在もあり、貸館業務は、民間にやってもらった方が効率的で、人件費も安いのではないか。

生涯学習センターの目的の一つの「指導者養成」は弱くなったという話を聞いた。これは、貸館業務がメインになっているということかもしれない。

生涯学習センターについて、利用者の立場としてだが、月に2回ほど全県の集まりで利用している。他に利用できる施設が少ない。教育関係の利用者に特化していくという考えもあるのではないか。

生涯学習センターについて、財団に委託していたものを直営にしたということがなかなか理解できない。教育と貸館を有機的に展開するとの説明を受けたが、本当なのかなと思う。費用対効果の実現のためにも、利用のほとんどが前橋市民であり、市の施設ではだめなのかと素朴に思う。

理科離れが叫ばれている中で、少年科学館は興味を持てる施設であり、多くの子どもたちに見てもらいたい。

少年科学館やプラネタリウムなどは、ぐんま天文台や自然史博物館とも連携し、双方の利用者増につなげるべき。